

2. 養育環境とパーソナリティの健康

—女子高校生を対象にした分析—

愛育相談所	山本清恵
”	吉川政夫 (東海大学)
調査研究企画部	網野武博
客員研究員	石井哲夫 (日本社会事業大学)
社会福祉法人嬉泉	石橋悦子
厚生省児童家庭局	山本保

要約： 子どもの健康な自我の発達には養育上の人間関係に拠るところが大きい。本研究では継続して調査を行い、福祉施設の入所児のパーソナリティの健康度および、幼稚園児のパーソナリティの健康度をそれぞれ保育者の評価により得た。今年度はさらに、思春期の子どもの健康な自我の発達に焦点を当て、女子高校生を対象として母親によるパーソナリティの健康度評価と子どもの自己評価について検討を加えた。いずれの場合も、子どもの生活において、養育者の好意度が子どもの自我の発達に大きく影響していることがうかがわれるが、とくに思春期の子どもについては他人との人間関係に極めて消極的になっており、不安定であることがわかり、母親の好感的接触が必要であることが認められた。

見出し語： パーソナリティの健康度 思春期の子ども 母子関係

Upbringing Environment and Health of Personality

- Analysis on Senior High School Girl -

Kiyoe YAMAMOTO, Masao KIKKAWA, Takehiro AMINO,
Tetsuo ISHII, Etsuko ISHIBASHI, Tamotsu YAMAMOTO

Believing that the healthy ego development of children largely depends on the human relations while they are brought up, we firstly examined the instructors' evaluations of the health of personality of the children admitted to Welfare Institutions, then we examined the evaluations of kindergarten children by both the parents and the teachers in charge last year. In addition to these examinations, this year we studied the difference between mothers' evaluations and children's self-evaluations placing the focus on the healthy ego development of children at puberty. Either evaluations indicate that in a child's life, the favorable feeling of a rearer exerts a great influence on child's ego development. It was found that the children at puberty were especially negative and unstable in their human relations with other people. It was recognized that it is essential for mothers to keep favorable contact with their children.

Key words: Health of Personality, Children at Puberty, Mother-Child Relations

I. 研究目的

子どもの健康なパーソナリティの形成は順調な自我の発達に伴って遂げられ、一般には家庭環境の中で行われる。本プロジェクトでは1987～8年に、情緒障害児短期治療施設及び養護施設の入所児を対象に行った調査で、父母との関係性が入所児のパーソナリティの健康にかかわりが深いことを知り、養育機能の失調が子どもの自我の発達を阻害する大きな要因であることを確認した。³⁾ この調査において、試行的にパーソナリティの指標としたものは、人間関係におけるⅠ安定性、Ⅱ情性、Ⅲ客観性、Ⅳ意欲性、Ⅴ知性、Ⅵ耐性、Ⅶ情愛性、Ⅷ好感性の8領域である。上記福祉施設の入所児では共に、Ⅲ客観性及びⅥ耐性が低い(指導員の評価で)ことが認められた。また昨年度は、母子分離の初期過程である幼稚園児を対象に同じく8領域について調査をし、その結果、Ⅲ客観性、Ⅴ知性およびⅥ耐性が低い(親の評価で)ことが認められた。⁵⁾ 両調査結果で、自己実現に向けて自我を向上させ始めた幼児と、養育機能の失調が原因で自我の発達が阻害されているとみられる施設入所児との共通性が見出された。その反面、幼稚園児では親、教諭とも全般的に高い評価を示し、自我の順調な発達には養育環境の好意的認知が必要であることが認められた。⁶⁾ 本年度は、上記福祉施設入所児とほぼ同年齢の思春期の一般家庭の子どもを対象にし、パーソナリティの健康に関する調査を行い、自己実現を目指して大人へと移行していく思春期の微妙な心理的な揺れが、他者との人間関係にどう反映し、子ども自身が自己をどう捉えるか、また母親がそれをどう認知するか検討する。

II. 調査の方法

1. 調査対象及び調査の手続き

都内の私立女子高校1・2年生計170名に対して、学級担任を通じ、質問紙法によるパーソナリティの健康に関する自己評価および、それぞれの母親(170名)に依頼し、同じ調査により子どもの評価を得た。

2. 調査項目

質問項目はパーソナリティの指標とした前出の8領域についてそれぞれの概念を表す基本項目(Ⅰ. 気分が安定しており、機嫌がよい。Ⅱ. 感情の表現が豊かであるⅢ. ものごとを柔軟に、客観的にとらえることができるⅣ. 活発で意欲的である。Ⅴ. 自分の能力がよく発揮さ

れている。Ⅵ. 困難なことにも耐えることができる。Ⅶ. 他人を思いやり、うまくつき合っていくことができる。Ⅷ. 人に好かれる。)と、その項目のそれぞれに下位項目として4項目(日常の具体的な状況を設定した質問)を加え、40項目(5項目×8領域)とした。8領域の基本項目は、情緒障害児短気治療施設、養護施設の入所児および、幼稚園児について行ったものと共通である。下位4項目の構成は、昨年幼稚園児に行ったものと同様な主旨で、思春期用に表現を改めた。各項目の具体的内容は表1のとおりである。なお昨年同様、質問文には日常的なフレーズを用いることに留意したため、下位4項目中2項目は肯定的表現で、他の2項目は否定的表現で表示し、32項目を無作為に配置し、その後基本8項目をまとめてつけ加えた。

3. 調査方法と結果の整理

(1) 調査の回収は、生徒一人一人についての自己評価とその母親による独自の評価を得るために、生徒、母親の各自が閉封を条件にして、学級担任に依頼し、母子を対に回収した。

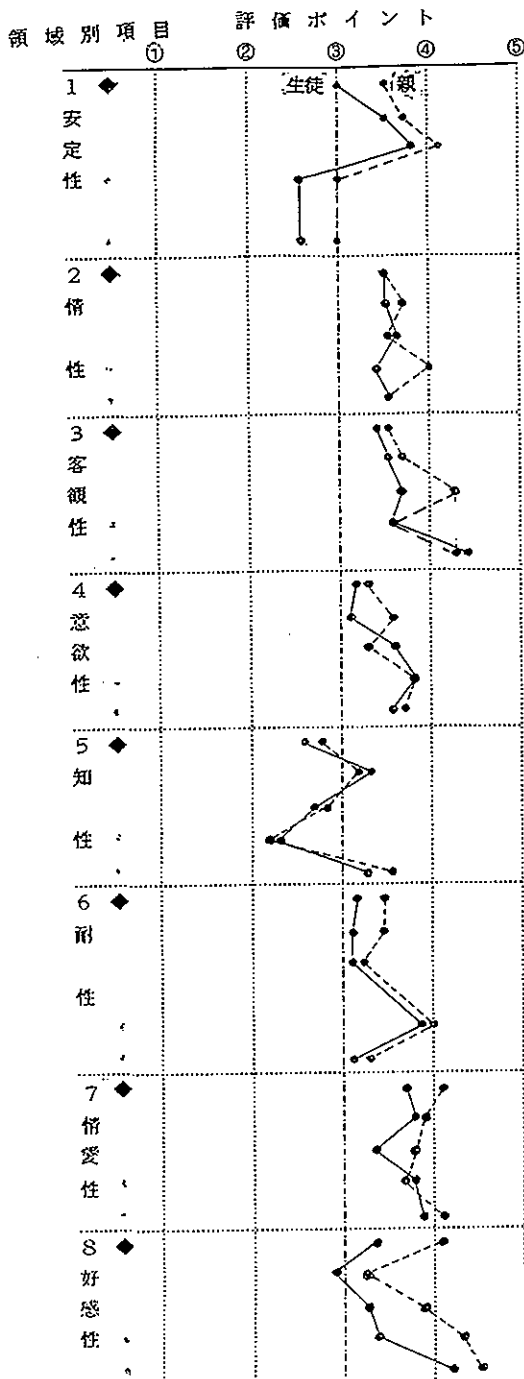
(2) 評価は各項目毎に5ポイント・スケールを用いた。表1に示す結果の数的表示は、昨年の幼稚園児の場合と同様に、全項目について評価ポイントが高い程健康度が高く、ポイントが低い程健康度が低いことを示す。すなわち、調査においては否定的表現を用いた16個の質問項目の評価ポイントについては全て、回答された評価結果を逆転変換処理し、表1および図1の数値では、健康度評価ポイントとしての解釈は肯定的表現の質問と同じになるようにした。

III. 結果

1. 評価平均の比較

(1) 自己評価について学年別にみると、表1に示すとおり、1年生78名、2年生92名について各項目毎の平均は、1年生は2.4～4.4、2年生は2.2～4.3の間にあり、共に最低の評価は知性領域の「勉強や活動がもっとできるはずなのに、その力を発揮していない」であり、最高評価は客観性領域の「ユーモアや冗談がわからない」である。両項目共否定表現を用いた項目であるが、勉強はほどほどで良く、ユーモアや冗談が大好きな平均的現代っ子だと理解される。学年間の差は40項目中2項目が分散分析による有意差($p < .01$)が認められたのみであり、他の38項目は学年差は認められない。

1・2年生とも情性、客観性、情愛性の領域では、や



(注) ◆印は各領域の基本項目
 ●印は逆転項目を変換処理したもの

図1 領域別 各項目の平均値

や高い自己評価がみられるが、全般的に自己を厳しくみつめようとし、自己主張をひかえているようにみられる。

(2) 子どものパーソナリティの健康についての母親の評価は、表1の「評価者親の欄」で示すとおり、2.8 (知性領域) ~ 4.5 (好感性領域) の間にあり、情愛性および好感性領域で大体高い評価がみられる。またこの数値による母親からみる子どものイメージは、知性面では少し難があるが、おおかたルールを守って行動し、人のことを咎めたり責めたりしない、むしろ、人のことを思いやり、したがって、人にも好感をもたれ、いつも仲間がいて、ユーモアや冗談のわかる明るい子という、パーソナリティが健康である理想的な女性のタイプが描かれる。如何に母親が子どもを好意的に認知しているかがうかがえるであろう。

子どもの自己評価との評価差は、表1「主効果欄」でみるとおり、好感性領域では全ての項目で $p < .001$ で有意に母親が高い。

2. 評価者間の相関関係

平均値の比較では、自己評価と母親の評価に著しい差がみられる領域があるので、子ども一人一人の両者間の評価の関連性を分析するために、両評価の相関係数を求めたところ、表1の右の欄に示すとおり、.04 ~ .47 の間の係数がみられ、評価の一致度はあまり高くないが、負の相関が無いことから、母親の子どもに対する認知の極端なズレはないと言える。このうち一番高い係数を示しているのは、「勉強や活動がもっとできるはずなのにその力を発揮していない」という逆転項目である。これは、両者とも評価の平均値が低い項目であるが、成績等によって比較的認知しやすいため、両者間のズレが少ないものと考えられる。つぎに高いのは「人気者である」という、比較的状態が認知しやすい外向的性格特徴の項目である。

最も相関関係が低いものは、「人に対して咎めたり責めたりして、同情をしない」という逆転項目であり、評価の平均値では両者とも高く評価している項目だが、母親には子どもの人間関係に関する認知がしにくくなってきているからだと思われる。

IV. 考察

思春期は子どもから大人へ心身ともに変化する時期であり、親のコントロールに依存していた選択や決定に満足できず自律を果たそうとし、精神的に揺れている状態

である。とくに人間関係で自己実現を行おうとする時、微妙な心の動きのコントロールが難しく、気持ちに反して防衛的にならざるを得ないことになる。本調査では、それがパーソナリティのやや厳しい自己評価に表れているように思われる。

反面この時期は、気持ちが家族より友人などの方に向き、母親への依存関係がかなり希薄になるので、必然的に母親は子どものことが分かりにくくなってしまう。その点で幼児期に行われる母子分離の状況とは異なる。幼児期は同じ世界の中で子どもが自律していくのだが、思春期では母親は子どもを違う世界に送り出す心的作業を行わなければならないのである。母子関係の意味が大きく変わる時期であるが、子どもの側は自我の発達にともない自己の中から変化を要求するが、母親は努力で行うのであるから、ややもすると子どもを見失う状態も起こり、適確な子どものパーソナリティの評価が難しくなるだろう。しかし、母親とはあくまで子どもを受け容れ養育する存在であり、そこに存在感を見いだしている母親が多いのである。本調査で、母親の評価が子どもの自己評価よりおおむね高いのは、そういう母親の存在が感じられ、好意的な評価であると思われる。とくに好感性領域では平均4.0の評価であり、他者との信頼関係に自信を失いがちな子どもを強く受け止めてくれるような存在であるように感じられる。

本調査の対象児と母親に関しては、平均的に健康なパ

ーソナリティである子どもと、かなり好意的に子どもを見ている母親との関係であると思われる。母親が好意的に子どもを受け容れられるのは、母親が安定した情緒であることの現れである。つまり、思春期の子どもの不安定な情緒を支えるのに必要なのは、母親を中心とする安定した家庭環境であると言えるのではないだろうか。母子関係も依存関係から相談相手としてのいい関係が母親に求められるようになり、母親に対する役割期待も変化していき、子どもはその安定した環境の中で順調に自我を発達させ、大人へと脱皮を果たすことを期待したいものである。

引用・参考文献

- 1) 吉川政夫他「情緒障害児短期治療施設における情緒障害児の指導・処遇に関する研究」日本総合愛育研究所紀要第23集
- 2) 吉川政夫他「養護施設における生活指導が果たしている家庭養育機能の分析」同上第24集
- 3) 吉川政夫他「施設入所児童のパーソナリティの健康度の評価」同上第25集
- 4) 石井哲夫他「子どものパーソナリティの健康に関する心理学的検討」同上第26集
- 5) 山本清恵他「幼児のパーソナリティの健康度の評価」同上第27集

表1 各項目における要因別の平均値と分散分析の結果及び評価者間の相関

領域	領域別項目	要因別平均値と分散分析の結果						評価者間の相関係数 (生徒×親)
		クラス		評価者			交互作用	
		1年	2年	主効果	生徒	親		
1 安定性	◆気分が安定しており、機嫌がよい	3.1	2.9		3.0	3.5	***	0.25
	誰に対しても、あまり好き嫌いなくつき合う	3.6	3.4		3.5	3.7		0.31
	明るくおろかである	3.9	3.8		3.8	4.1	*	0.33
	・他人から非難されたり困ったことに会うと、感情的になったり不安や動揺をすぐ顔に表す	2.7	2.6		2.6	3.0	*	0.20
	・その日によって気分のよい時と悪い時がはっきりしている	2.8	2.6		2.6	3.0	***	0.23
2 情性	◆感情の表現が豊かである	3.5	3.5		3.5	3.5		0.23
	周囲や社会の出来事に感動したり、義憤を示したりする	3.6	3.5		3.5	3.7		0.23
	芸術の鑑賞や表現を好む	3.6	3.6		3.6	3.5		0.41
	・素直に表現せず、皮肉をいったりする	3.5	3.3		3.4	4.0	***	0.20
	・感動を言葉や表情に出さない	3.4	3.6		3.5	3.5		0.24
3 客観性	◆ものごとを柔軟に、客観的にとらえることができる	3.4	3.4		3.4	3.5		0.18
	自分のしたことの結果を客観的に評価できる	3.5	3.5		3.5	3.7		0.18
	ルールを守って行動する	3.6	3.7		3.7	4.3	***	0.26
	・自己主張が強く、他人の言うことに耳を傾けようとなしない	3.8	3.5		3.6	3.6		0.25
	・ユーモアや冗談がわからない	4.4	4.3		4.4	4.3		0.21
4 意欲性	◆活発で意欲的である	3.3	3.1		3.2	3.3		0.33
	ものごとに夢中になったり、集中したり、長続きする	3.2	3.1		3.1	3.6	***	0.39
	新しいことに好奇心を示し、積極的に取り組む	3.6	3.5		3.6	3.3	*	0.27
	・チームワークを必要とする時にすすんでやろうとなしない	3.8	3.8		3.8	3.8		0.19
	・役割を頼まれても、嫌がったり避けたりする	3.6	3.6		3.6	3.7		0.14
5 知性	◆自分の能力がよく発揮されている	2.6	2.6		2.6	2.8	*	0.25
	ものごとを深く掘り下げて冷静に考える	3.4	3.2		3.3	3.2		0.22
	能力や知識の豊かさが、他人の尊敬や注目を集めている	2.7	2.6		2.7	2.8		0.32
	・勉強や活動がもっとできるはずなのに、その力を発揮していない	2.4	2.2	**	2.3	2.2	*	0.47
	・自分であまり考えようとせず、他人にまかせる	3.3	3.2		3.3	3.6	**	0.29
6 耐性	◆困難なことにも耐えることができる	3.4	3.1		3.2	3.5	*	0.28
	困ったことや嫌なことがあっても、すぐに人に頼らない	3.1	3.2		3.1	3.5	***	0.21
	目的を達することが容易でなくても、粘り強く努力してその機会を待つ	3.2	3.0		3.1	3.2		0.33
	・少しのことでも我慢できずに、喧嘩したり、人のせいにする	3.9	3.9		3.9	4.0		0.15
	・難しいことにおつかると、すぐあきらめる	3.2	3.0		3.1	3.3		0.28
7 情愛性	◆他人を思いやり、うまくつき合っていくことができる	3.8	3.6		3.7	4.1	***	0.22
	人に迷惑をかけると、素直に謝る	3.8	3.8		3.8	3.9		0.32
	弱い人や老人をいたわり、面倒をみる	3.2	3.4	**	3.4	3.8	***	0.33
	・他人が困っているても、すすんで手助けしようとなしない	3.8	3.9		3.8	3.7		0.14
	・人に対してすぐとがめたり責めたりして、同情をしない	3.8	3.9		3.9	4.1	*	0.04
8 好感性	◆人に好かれる	3.5	3.3		3.4	4.1	***	0.27
	人気者である	2.9	3.0		2.9	3.3	***	0.46
	人から信頼される	3.3	3.3		3.3	3.9	***	0.19
	・なんとなく他人から好感をもたれない	3.5	3.4		3.4	4.3	***	0.17
	・人から相手にされない	4.2	4.2		4.2	4.5	***	0.19

(注) ◆印は領域基本項目(その領域を代表する項目) ・印の逆転項目を変換処理したため、すべての項目について、評価ポイントが高いほど健康度が高いことを示す。 * 印はp<.05、** 印はp<.01、*** 印はp<.001であることを示す。